

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第4号

2017. 1. 25 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 D i o 23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

記録的な大雪の中で思うこと

昨年間に、札幌は積雪が90cmを超えるという50年ぶりの大雪となり、厳しい冬が続いています。除雪された雪の山が道路にはみ出して狭くなり、車同士がすれ違えない道があちこちに出来てしまっていて、運転時は例年以上に慎重にならざるを得ない状況になっています。ずっと北海道で暮らしてきた私たちでも、今年の冬は少し異常に思えます。一日の業務の始まりが雪かきという毎日が続き、うんざりすると共に身体中が筋肉痛、本当に雪が恨めしくなります。車で移動するときも、夏場の倍以上の時間的余裕を持たねばならないため、自然とスケジュールがタイトになります。この時期、ほとんどの北海道民が「早く春になってくれ」と願い、雪が解けてなくなるのを待ち望んでいます。



道が狭くて車がすれ違えない場所も・・・も・・・



除雪を怠ると車もこの有様です

昨年1年間でサンレジデンスに入居された人はちょうど30名、平成28年12月31日現在、95名の方々が入居されています。その内、14名が就労による完全自立を果たし、また3名の方がサンレジデンスを卒業して他の物件に移られました。そのほかの方々もそれぞれの自立を目指し、日々努力しながら生活を送っています。しかしその一方で、退去者（自立ではない）も23名を数えました。亡くなられてしまった方や長期入院のために一時的に

退去した方も含まれますが、やはり私たちが一番空しくなるのは、何も相談してくれることもなく失踪する人、また、犯罪によって警察に逮捕される人がいることです。

サンレジデンスに相談に来る人は、それぞれに様々な問題を抱えています。最大の問題点は全ての人に共通しています。それは「住む場所、帰る場所がない」ということです。それをいち早く解決して生きるための環境を整え、立ち直りを決意したはずなのに、何故その気持ちが持続しないのだろう、何故また刑務所に戻らなければならないことをしてしまうのだろう、私たち支援する側に何か問題はないのか・・・いろいろと考えますが、頭の中はいつも堂々巡りで、答えなど見つけられないでいます。

※平成 28 年 12 月 31 日現在の入居状況

男性	女性	世帯で入居	計
78 名	13 名	4 世帯	95 名

立ち直りの難易度

困窮という言葉の意味は、経済的困窮に限ったものではありません。障害等による身体的困窮、他者に対する関係的困窮もあります。だから、個々人によって立ち直り（自立）の形は違って当然です。複雑に絡み合った問題によって一度社会からはみ出し、やり直しを図ることはもちろん容易ではありません。いくつもの壁を越えなければならないでしょう。

では、その壁を乗り越え、立ち直りを達成できるのは一部の人だけでしょうか。私はそう思いません。むしろ誰もが出来ることだと思っています。

それはどれくらい難しいものなのでしょう。例えて言うのなら、「普通自動車免許を取得する」くらいの難易度だと私は考えます。運転免許を取りたいと思い立って自動車学校に通う人は、そのほとんどの人があたりまえのように免許を取得します。でも、それまでの過程は決して簡単ではありません。技能講習のほかに学科講習を受け、仮免許試験に合格して路上での講習に移り、本免許試験に合格して更に学科試験も合格する、そしてようやく免許証が貰える訳で、誰もが楽をして取っているのではないのです。お金も掛かるし手間隙も掛かる、それでもみんな免許を取りに行くのはどうしてでしょうか。

それは、運転免許が自分にとって必要と考えているからに他なりません。立ち直りを決意した人たちにとっても同じことが言えると思うのです。努力したくてもどうすることも出来ない人たちがたくさんいる中で、せつかく生きる環境が出来たのであれば、そこで今、自分が努力すべきことは何か、どう行動すべきか、それに必要なものは何か・・・当

事者に真剣に考えて欲しいのです。いろいろな事柄をクリアしなければなりませんから、当然の事ながら簡単ではありません。でも運転免許を取るのと同じように、不可能な事柄ばかりが立ち塞がっている訳でもありません。むしろ本気で取り組みさえすれば、いつも間にかクリアになっていたと思える事柄の方が圧倒的に多いはずです。

「自分がもう一度社会生活をするためにいかに本気になれるか」立ち直りが出来るか出来ないかは、この一点に尽きると思います。ワラにもすすがる思いでサンレジデンスを訪れた人たちには、どうか最初の相談に来たときの気持ちを忘れず、何よりも自分のこれからのために、正面から自分と向き合って欲しい、それが私の思いです。

拡がる連携の輪

サンレジデンスの活動を外部に告知・アピールするために、ホームページを新しく開設してから1年が経過しました。昨年は、明らかにその効果を実感した年になりました。

ホームページを見た当事者本人からの直接の相談や、当事者の家族からの相談依頼が増えたのはもちろんこと、北海道各地にある生活サポートセンター、病院のソーシャルワーカー、医療法人社団等からの問い合わせや相談が来るようになり、札幌市だけではなく、広範囲からの受け入れが増えています。また、協力機関が増えたことにより、デイケアサービスを受けるための手続きがスムーズになったり、一般就労の難しい入居者には他団体が行っているジョブトレーニングに参加できるようになったりと、少しずつではありますが支援の精度も上がってきたように感じます。

そんな中、Hさんという一人の女性相談者が訪れました。そのとき彼女は妊娠中、しかもすでに臨月という時期でした。非常にデリケートな問題なので詳しい事情をここに記すことは出来ませんが、ご本人の了解をいただいた上で少しご紹介しようと思います。

Hさんはブルガリアの大学に留学し、8年間医学の勉強をしていました。聞くところによると、ブルガリアはユーロ圏の中でも貧困の国で、その生活状況は日本とは比べ物にならないそうです。昨年10月、留学仲間の伝手を頼って帰国、札幌に来ましたが、諸事情により受け入れ先を失うことになりました。大きなお腹を抱えて困り果てたHさんは、札幌市の基幹センターに相談、そこで女性の支援を専門にしている団体を紹介されます。しかし間もなく出産を控えている彼女には、一刻も早く生活保護を受給しながら生活できる場所探しが最優先でした。そこで、その団体を通じてようやくサンレジデンスに繋がったのです。初めての面談のとき、彼女の話聞きながら私は正直、「さて、どうしたものか」と悩んでいました。このような状況の方をサンレジデンスは受け止め切れるのか、私たちが提供できる物件が、子供が生まれた後の生活環境に適しているか等を考えました。だけど、彼女はもう切羽詰った状況です。今はとにかく、無事出産できる体制をとることにして、職員が常駐し、ある程度生活サポートが出来る南郷5（第2事業）に入居してもら

うことにしました。出産が近くなると、ブルガリアから相手の男性が、文字通り飛んできたかのように来日し、彼女に寄り添っていました。そして昨年12月中旬、Hさんは元気な女の子を出産しました。父親になった男性も、いずれ日本に来て、親子3人で生活する計画を立てているそうです。

今回のケースは思いがけずグローバルなものになり、後々まで私たちの印象に残るであろう出来事でした。そして、困窮のかたちが今後更に多様化していく社会において、私たちはどこまで対応できるのだろうかと考えさせられるケースでもありました。

アパートナー札幌支店 開設30周年

協働していただいている株式会社アパートナー札幌支店が、1987年（昭和62年）に開設されてから、今年で30周年を迎えます。日々変化していく情勢の中、長きに渡って存続し続けることの意義は、計り知れないほど大きなものだと思います。それにしても30年、凄い年月です。いつもお世話になっている現在の職員の方々はもちろんですが、過去に札幌支店の業務に携わった多くの方々の努力と尽力が積み重なって、30年という長い歴史が出来上がったのでしょう。NPO法人サンレジデンスも札幌支店の中から産声を上げ、現在に至っています。本当に感謝の気持ちしかありません。私たちの活動も、継続し続けることによってはじめて社会貢献に繋がるのだと考えています。支店の足跡に貢献された方々や、関係者の皆様をお招きして、今年6月に札幌支店開設30周年記念行事を実施する予定です。この先40年、50年と続けていくための弾みになるような、そんな行事になればと思っています。



30年目のアパートナー札幌支店

新しい一年が始まりました。サンレジデンス職員の今年の抱負を、それぞれ漢字一文字で表現してみました。皆さま、どうか今年もよろしくお願ひ致します。

代表理事 照井 幹雄 物事や気力のもと、根気、根性、根源の『根』

理事所長 飯高 喜久男 信頼の他、真実、誠実という意味もある『信』

理事副所長 松下 和広 暖かい、温もり、おだやかという意味で『温』

<人はみな幸せに：「幸せ」のカタチはひとそれぞれ、時の流れ24h×365日は六根を清らかに、そしておだやかにルールを守り生きましよう。どっこいしょ！ きっといいことがあるから。後付け Terui。>

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス
松下 和広